大学出版

The Association of Japanese University Presses

No.126
2021.5
春

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

[特集] **印刷文化と印刷博物館**

印刷文化学とミュージアム
——印刷博物館は、こう考えています　**樺山紘一**　1

印刷文化学の起点をつくる
——『日本印刷文化史』と『印刷博物館コレクション』　**川井昌太郎**　6

印刷の歴史と技を学ぶ——展示のリニューアル・プロジェクト　**山口美佐子**　11

書体の魅力を体感する——印刷工房の欧文書体アーカイブ　**早川知子**　16

進化する印刷博物館——過去・現在・未来　**宗村泉**　20

[新連載] **何年経っても忘れられない、編集者の一冊《1》**

チェーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』　**山田秀樹**　表2

大学出版部ニュース　26

一般社団法人
大学出版部協会

何年経っても忘れられない、編集者の一冊《1》

チェーザレ・ベッカリーア著／小谷眞男訳『犯罪と刑罰』

山田秀樹（東京大学出版会）

カバーには、帯を剥がすと『犯罪と刑罰』の自筆原稿がくっきりと。公権力に異を唱えるこの作品は匿名で出版され、ローマ教皇庁の禁書目録に入れられるものの、その反響は大きく各国に伝播した。それから約250年、この新たな日本語版は、ベッカリーアの著作を管理するイタリアの財団にもしっかり所蔵されている。
［東京大学出版会・2011年／四六判・216頁・定価2420円］

弁護士の友人は、法律家として進路を選ぶ際、裁判官になることは最初から選択肢になかったと言う。その理由を尋ねると、「人を裁くのは無理」とのこと。裁判官が下す判決は、当事者のその後の人生を左右しかねず、責任が重過ぎて自分にはとても背負い切れないらしい。それまではぼんやりとイメージしていただけの「裁判」が、リアルに迫ってきた瞬間だった。

それから約十年後、人が人を裁くことの意味を、そして法と社会の在り方を、徹底的に考え抜いた原稿に出会う。チェーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』の翻訳原稿である。

本書は言うまでもなく、ヨーロッパ近代刑法学の基礎を築いた古典であり、既に岩波文庫に訳されている。ただし、今回は岩波文庫版とは異なり、ベッカリーア自身が手掛けた最終完成版を底本に、新訳として刊行したいという。訳者の小谷眞男先生から送られてきた原稿を、さらに明瞭に、読みやすく改善することを目指し、編集作業はスタートした。

本書によって「罪刑法定主義」「拷問の禁止」「応報刑から教育刑へ」など、近代法における刑事裁判のルールが明らかにされ、フランス革命期から一九世紀以降の各国刑法典の編纂、その後の刑事法の理論と実務の発展が促された。さらには、「死刑の廃止」を初めて明確に提唱したことでも歴史に名を残す。しかしながら、新訳をとおして伝えたい本書の意義は、「刑事法の革新」にとどまらず、刑法という視角から「新しい市民社会論」を構想した点にあった。その意味で単なる法律書ではなく、包括的な社会思想の書というべき性格も持っていることを、翻訳と解説が浮き彫りにしていた。

裁判員制度の幕開けからしばらくして、新訳版を刊行した。帯にある「あなたは人を裁けますか？」というキャッチコピーは、記憶の片隅にくすぶり続けていた友人との会話が何度も甦り、迷うことなく付けたものである。これは本書を貫く通奏低音であるとともに、自分への問い掛けにもなっている。

特集＊印刷文化と印刷博物館

印刷文化学とミュージアム——印刷博物館は、こう考えています

樺山紘一（印刷博物館　館長）

はじめに

印刷博物館は、二〇二〇年に創設二〇周年を迎えました。まだまだ若年のミュージアムですが、専門分野を特定した博物館として、そのミッションを達成するために、生真面目に事業目標を設けております。その成果についての評価作業をはたしながら、将来にむけての活動方針を模索してきました。この特集で披露するのは、その骨格の一部ですが、市民社会や知的サークルとの対話を求めて発信するメッセージでもあります。近年にあって、博物館や美術館といった施設が、さまざまな難局に直面しつつも、めざましい成果も収めているなか、私たちも初心に帰って、立ち位置を検証しています。ここでは、印刷博物館が体現するミュージアムとしての基本姿勢と、さらにはそれが目指す印刷文化学という知的分野の自己確認を提示できればと考えています。

博物館の役割

第一に説明したいのは、博物館がはたすべきミッションについてです。読書家や編集者の方がたにとっては、余計なことに聞こえるかもしれませんが、じつはこれは現代社会にとって、かなり重要なことです。というのも、かねては「博物館行き」などといえば、ほとんど無用になった古物の収容場所を指しかねず、そうでなくとも世の中からほど遠い好事家の領分を想像させがちです。けれども、現代社会になってみると、この認識は大きく変化しつつあります。印刷博物館もこの潮流を受けとめて、その役割をさしあたり次の三つに区分して理解し、活動に取りくんでいます。

その第一は、関連資料の収集と保存です。資料のうちに

は、ごく初期に印刷された文書や絵図など、いまでは貴重となった物品もあります。印刷物ですから当然のことには、かなりの数が複製されたはずですが、実際にはごく一部が残存しているだけといった、簡易な冊子や紙片などもあります。また、それらのほとんどは、往古の技術で製作された紙に印刷されました。これらは時代とともに劣化がすすみ、適正な処置をほどこさないと、資料価値を失ってしまいます。収集と保存とは、印刷博物館にとってとても重要で、かつ難題ふくみの作業を要求します。

第二は、調査と探究。これは博物館にとって中核となる活動の一端です。印刷物のなかには、書籍や雑誌、冊子や紙片、あるいはさまざまな方式で作成された版画や写真などがふくまれます。その種類や数量は膨大なものとなりますが、それの由来や経緯を明らかにすることには、かなりの困難もあります。もっとも難しいのは、それらの製作過程を解明することです。文書であれば、どんな活字や機械で作られたのか。あるいは版画であれば、凸版か凹版か平版かという版式の推定には、かなり高度な鑑識能力が求められます。

第三は、博物館が外部からはっきりと識別される活動、つまり展示や実習です。印刷博物館では、過去の作品や製品を、有名・無名を問わず必要に応じて展示していますが、その資料の成り立ちの経緯を分かりやすく解説して、来館のお客さまにご覧いただこうとします。それは一般の博物館とみな同じです。博物館にとっては、社会とのあいだでそうした対話こそが生命線だと理解しています。ただし、ここにはもうひとつ重要な局面が加わります。私たちのミュージアムでは、そうした印刷物作成の現場のプロセスを、実際に再現して実習していただく場を設けました。「印刷工房」と呼んでいます。そこでは、かつて産業現場で使用された歴史的な印刷機械を収集し、整備したうえで実際に稼働させています。巨大な輪転機は収容できませんが、一九世紀頃までに実際に利用されていた手動の名機を稼働させています。とくに重要なのは、すでに過去のものとなってしまった金属活字。その一部を文選・植字して印刷機にかけます。それは近代印刷の原点というべきものですが、これこそが身をもって印刷を体得・認識する最大の博物館体験ではないかと思います。じつは、かつてであれば、街の軽印刷屋さんではどこでも実見できたもの。いまでは博物館においてこそ、リアルに追体験できるわけです。

以上の三つのプロセスによって、私たちの博物館は成り立っています。このことは、ほかのさまざまなミュージアムでも、共通に目指しているでしょう。

印刷文化学のストラクチャー

印刷博物館は、以上に見てきたような常設の施設であり、また実際に稼働する機構でもあります。どれもが不可欠な部分をなしていますが、ここではそのうちでも探究・調査

に関わる部分だけを、いますこし細部にわたって確かめてみましょう。場合によっては、この部分がミュージアム活動の核心だと見る向きもありますので。私たちは、この探究・調査の作業を、一言でまとめて「印刷文化学」と名付けています。学術上で、一定の輪郭と内実をもった「学」であるという意味で。もちろん、いまだ学術として完結した「学」となりきれておらず、まして構成員として研究者や体制が整えられていないことなどから、あえていえば形成途上にある「学」とするほうが妥当でしょうか。

いずれにせよ、印刷文化学は博物館を支える骨組みであり、それはいくつかの柱から成り立っています。ここでは、三つの支柱をとりあげて、細部をかいまみることにしましょう。第一には、技術としての印刷の観察・考察があります。印刷はその出現からして、オリジナルのテクストや図像を、道具や機械を使って複製する技術的手段です。手やその延長としての道具を使って複写するところから、より多く、より正確に、より安価に複製するために、じつに多くの技法や手段を開発してきました。その種差を追いもとめるのは、大変スリリングな仕事になります。そしてなによりも、この技術の展開の末には、いま二一世紀の現在、途方もない拡がりをみせてきたデジタル印刷の地平がみえてきました。急展開するデジタルの印刷技術は、在来のさまざまなアナログ技術とどのように折り合うのか、あるいは排除しあうのか。こうした技術の領分の多様な拡がりのなかで、印刷という技術文明の過去と未来を見渡してみたいと考えています。

第二の柱は、表現の方法です。印刷には、大まかに言えば、文字テクストの複製と図像ビジュアルの複製という二つのフィールドがあります。そのいずれであれ、複製にあっては、その表現技法が重要な意味をもっています。たとえば、文字のテクストが、仮に同一の内容を表示するにしても、どんな文字の字体で、どんな版面に組み上げられるかで、テクストがもつ意味や作用は変わってくるでしょう。図像についていえば、どんなデザインで、どんな色彩で再現するかによって、印刷の効果は千変万化するはずです。複製とは、ひとつの創作作業ともなりうるでしょう。こうして、表現という技術の無限の可能性をとおして、印刷文化の拡がりを確かめたいと考えています。現在でもなお現場で試行される無数の表現法の観察が、ここでは必要でしょう。印刷はオリジナルを忠実に、正確無比に再現するばかりか、表現の名のもとに、新たな文化を発見・創造する手段ともなりうるようです。

そして第三に、印刷文化学の大事な方法は、歴史的探究です。博物館は多かれ少なかれ、歴史的な展開を視野に収めた資料をとおして、説得的に説明することを課題にすると言ってよいでしょう。さまざまな歴史的なコンテクストのなかで、印刷文化の展開をあとづけること。ここから、人類にとっての印刷文化の重要な意味合いが、説明できる

と思います。

印刷の歴史から

あらためて印刷の歴史を考えるために、いくつかの方法を取りあげてみます。ひとつには、日本列島に中心の視点をすえて、その創始から現在までを、時間の系列にそってトレースすること。いまひとつは、現在の印刷文化の主流となった西洋の印刷システムの形成過程を中心にして、日本を含む各地からの参画をも順序だって記述すること。この二つの方法を前面に掲げて、どちらか一方を選択し、他方をそれに結びつけて「印刷の世界史」を完結させます。この二つの説明方式には、それぞれの特長があります。けっして、どちらか一方のみの選択というわけではないようです。いずれかといえば主流となった後者の方式を、かつて私たちも採用したことがあります。現在では、むしろ前者に傾いていると言えばよいでしょうか。

日本の印刷文化史の出発点は、奈良時代におかれています。「百万塔陀羅尼経」という仏教経典が、勅許のもとでおそらくは木版に刻みこまれ、紙に印刷されました。八世紀後半のことです。これを起点に、やがては寺院や宮廷から世俗の工房に拡がり、そして医学や博物学、文学など広い領域に引き取られていきます。江戸時代ともなれば、出版物の種類や、それの製作地も格段と拡大していきます。ついには、漢字以外にもさまざまな字体のかな文字も摺られるようになり、木版印刷の盛況は極限に達したといえるでしょう。

その途上にあって、一六世紀の末に斬新な印刷方式の導入がおこりました。朝鮮半島から紹介された活字印刷です。木製や金属製の活字という新方式が、日本に紹介されたのです。これを受けて古活字と呼ばれる印刷方式が、ちょっとしたブームを演出しました。しかも、ちょうどその頃、来訪したキリシタン宣教師によってヨーロッパ・スタイルの活字印刷が導入され、日本語による布教関連書が出版されます。しかし、やがてこのキリシタン版は禁圧の憂き目にあいます。また古活字本も旧来の木版本の大幅な普及によって、傍流におされてしまいます。ただし木版による図像印刷のほうは、周知のとおり浮世絵版画の名のもとに、華麗な成果を残すことになります。

こうした江戸時代の印刷文化の成熟とはまったく別途をたどって、明治の文明開化は、西洋型の印刷文化を導入し、世界の印刷文化の展開に同道するようになります。金属活字ばかりか、動力で稼働される印刷機械や、銅版・石版ついで写真図版を使用する図像印刷が導入されます。こうして日本近代の印刷文化は西洋近代のそれに合体していきます。そののち、現在までその動向には変化はありません。

さて、このように日本の印刷文化史をたどるとき、これとはまったく別途の歴史進行をも念頭におかざるをえなくなります。そのひとつは、中国の印刷文化です。六・七世

紀には開始されたと推定される木版印刷を手始めとして、さらには木製や陶製の活字を使用した活版印刷が、着実に成果をあげました。その発想の主要部分は朝鮮半島にもつたえられ、そこでは金属活字をはじめとする新規の印刷文化が創出されました。日本やベトナムをふくむ東アジア世界では、漢字印刷や版画印刷という成熟した文化が、独自の発展を刻むことになります。世界史における東アジアの印刷文化の展開に、おおきな意義を見出す必要が痛感されます。

これらアジアにおける印刷文化史の展開とはまったくちがう領分において、西洋のそれが成立しました。これの成立と展開とを中核において、世界の印刷文化の歴史を語ること。これが言うまでもなく、いまひとつの有力な方式です。一五世紀の中葉に、ドイツのグーテンベルクによって開発された金属活字による活版印刷。これが爆発的な発展を実現することになります。キリスト教聖書を出発点としたテクスト印刷は、近代文化全般を産みだす原動力になりました。ヨーロッパ全土を席捲したうえで、おりから進行しつつあった「大航海」を足掛かりとして、やがてアジア・アメリカなど世界各地に独自の印刷文化を植え付けていきます。産業革命後の世界にあっては、産業化した印刷事業が、世界共通のスタイルをとった文化の形成を促しました。この歩みは、二一世紀の現在にあっても、さらに強調されたかたちで進展をみていきます。

ここまで、印刷文化の歴史的な展開を展望する二つの方式を取りあげてきました。どちらを選択するかには、それぞれの理由がありますが、私たちはいずれにせよ多面的な視野を耕すことによって、より広く印刷文化を理解したいと望んでいます。先に整理した印刷文化学の諸テーマとともに、これからも博物館の課題として追究していきたいと思っています。本特集にあって、これからご紹介するのは、その達成成果の一部です。博物館のこれまでの経験と、現在の展開のさまをそこから読みとっていただけるでしょうか。

岩波新書
〈10講シリーズ〉
ヒンドゥー教10講 赤松明彦 定価990円
インド哲学10講 赤松明彦 定価924円
イタリア史10講 北村暁夫 定価990円
イギリス史10講 近藤和彦 定価1034円
フランス史10講 柴田三千雄 定価902円
ドイツ史10講 坂井榮八郎 定価902円
岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
http://www.iwanami.co.jp/

印刷文化学の起点をつくる——『日本印刷文化史』と『印刷博物館コレクション』

川井昌太郎（印刷博物館　学芸員）

『日本印刷文化史』が発売されてからちょうど三か月が過ぎようとしていたとき、『大学出版』特集記事として取り上げたいとお誘いがあった。印刷をテーマに古代から現代までを通史として取り上げたことに新鮮さがあったと評価してくださったことは、まさに本書で示したかった日本の印刷の特徴の一つでもあった。

印刷博物館は二〇二〇年一〇月に開館二〇周年を迎えたことを記念し、三点の書籍を刊行した。『日本印刷文化史』と『HISTORY OF JAPANESE PRINTING CULTURE』（『日本印刷文化史』英語版）、そして『印刷博物館コレクション』である。このうち、『日本印刷文化史』は講談社より出版され、書店で取り扱っている。残りの二点は、印刷博物館のミュージアムショップで販売している。

『日本印刷文化史』は二〇周年を機に大幅にリニューアルした常設展と密接に関連しており、いわば常設展を生み出す基になった「コンセプト・ブック」的な存在である。その姉妹編である『印刷博物館コレクション』は、当館が開館前より収集してきた資料の中から選りすぐりの収蔵資料を載せたいわば「名品集」にあたる。ここでは両者の読みどころ、見どころを紹介したい。

『日本印刷文化史』

刊行の背景と構成

印刷博物館の二〇年間の活動を踏まえ、日本の印刷文化の歴史を体系的に見通すことはできないだろうか、そのような思いから本書の発行計画がスタートした。印刷を文化や社会、技術や産業の一環とみなして、できるだけ具体的な実例に即しながら、その時印刷がどのような役割を果たしたのか、歴史的な展開をしたのか、あきらかにしたいと考えた。

出版の企画、準備は二〇一七年から始まり、最初は学芸員を中心に、各担当者が関心を抱く印刷の時代やテーマをレジュメにまとめて持ち寄った。それをたたき台にして、印刷文化学検討委員会の先生方と何度も打合せの場を持ち、ご指導いただきながら大まかなプロットを作成していった。「はじめに――読者の皆さんへ」では、本書の目的や思いをさらに詳しく述べている。

本書の本文は古代・中世・近世・近代・現代の五部から構成され、それらは全部で二二の章と六つのコラム、八つの印刷技術に関する挿話から成り立っている。古代は二章、中世は二章、近世は一〇章、近代は五章とし、最後の現代には特別に「22章　日本の図書館の歴史」を加えて、三章とした。

左：『日本印刷文化史』／中：『印刷博物館コレクション』／右：『HISTORY OF JAPANESE PRINTING CULTURE』（『日本印刷文化史』英語版）（ミュージアムショップにて発売中）

『日本印刷文化史』からわかる日本の印刷の特徴

本書で日本の印刷の歴史をたどっていくと、他国では見られない特徴があることに気づく。いくつか挙げられるが、ここでは大きく三点のポイントに絞り、紹介したい。日本の印刷の特徴は、①長い歴史があること、②東洋や西洋から影響を受けていること、③担い手や技術に多様性があることである。

①長い歴史があること

「1章　奈良時代に始まった日本の印刷」から本書は始まる。称徳天皇の発願により「百万塔陀羅尼」（七七〇年）が印刷されたことが、日本の印刷の出発点である。印刷産業が現在も続いていることを考えると、日本の印刷には一二五〇年以上の歴史があることがわかる。印刷が仏教政治にかかわっていた古代から、「21章　大量消費社会と印刷――効率化と標準化の時代」で触れたマスメディア、マーケティングメディアとして活用される現代まで、常に印刷は時代にあわせた役割を果たしてきた。

②東洋や西洋から影響を受けていること

島国である日本はさまざまな分野で外国からの影響を受けてきたが、印刷でも同じことがいえる。最も顕著な例として挙げたいのは、「5章　朝鮮出兵――朝鮮伝来活字はなにをもたらしたか」「コラム1　天正少年使節は木製印刷機をはこぶ」で記したとおり、中世から近世に移った時期に、朝鮮半島やヨーロッパから活版印刷が伝わったことだ。当時新しい印刷技術であった活版印刷を、天皇、武家、宣教師、医師、商人などが積極的に活用した。その中でも「6章　徳川家康を中心とする印刷・出版合戦」にあるとおり、家康による駿河版銅活字の製作、駿河版の開版は特筆に値する動きである。

③担い手や技術に多様性があること

天皇による印刷から始まった日本の印刷だが、中世になると「3章　鎌倉時代の印刷――本格化する寺院の開版」にあるように、大寺院が中心となり、経典や注釈書を盛んに印刷した。近世では「8章　京都・大坂・江戸　三都出版物語」に見られるとおり、版元たちの旺盛な印刷・出版活動が始まった。それによって、書物が知識人から一般の人々まで広がり、「9章　印刷が広げた江戸時代の行動文化――旅を助けた書物、版画、摺り物」「11章　学問の進展と印刷――本草学から植物学へ」「コラム2　農業技術を広めた農書」などが説明するように、印刷物は学問や産業の発展、余暇の充実に欠かせないものとなった。

印刷の担い手や技術が多様化していく時代は、近世から近代に移る頃である。「16章　戊辰戦争、そして明治政府による改革へ――幕末明治の活字文化」「17章　『描く技術』を伝える」「コラム3　めがね絵から紙幣まで――銅版画の普及」などが示すとおり、江戸幕府から明治政府へ政治体制が変わったとき、木版印刷から、銅版印刷、石版印刷、そして本格的な金属活字による活版印刷へ変化していった。これらの変化は、国立印刷局が設立されたことや民間で印刷会社が続々と誕生したことが大きく関係し、組織による印刷の時代が幕開けしたことを意味する。

近代から現代にかけては、印刷が社会環境の変化、読者や消費者のニーズを捉えて、ますます拡大していく時代である。「18章　資本主義社会と大衆文化の成立――大正時代の印刷」では、マスメディアの発展や消費社会の牽引役として新聞や雑誌など、印刷物の存在が大きかったことがわかる。「20章　高度経済成長と素材のバリエーション」では、戦後の日本人のライフスタイルの変化にあわせて、商品の包装資材や住宅の建材・家具材にも印刷が活用されていった様子が描かれる。印刷は情報を伝える媒体に加えて、生活に欠かせないインフラの一部を担う役割も果たすようになった。

以上ここに挙げたポイントの他にも印刷にはさまざまな側面がある。この先はぜひ本書を手にとって興味のある章から読み、印刷の多様性を感じていただきたい。なお、本書を全ページ翻訳した英語版も同時に刊行した。日本には誇るべき印刷文化があることを世界に向けて発信していきたい。

『印刷博物館コレクション』

刊行の背景と構成

印刷博物館が収蔵している資料は、前身である印刷史料館（一九八七～二〇〇〇年）のコレクションが母体となっている。さらに二〇年間におよぶ活動を通して、印刷に関する資料の収集・保存を続けてきた。購入した資料、寄贈された資料、社内で引き取った資料など、由来はさまざまだが、現在その数はあわせて七万点以上となる。その中か

らほんの一部ではあるが、当館の収蔵する印刷資料の希少性、価値を伝えたいという思いがあり、本書の発行を計画した。選びに選び抜いた「名品集」であり、当館の名刺代わりともいえる図版集である。

本書は①日本の書物、②西洋の書物、③版画とポスター、④印刷道具と機械の四章から構成され、全部で七七点余りの収蔵品を掲載している。ここでは各章から一点ずつ、どんなお宝があるのか紹介したい。

『印刷博物館コレクション』に掲載された名品

①日本の書物

『FRONT』（一九四二～四五年）は太平洋戦争下に発行された日本のプロパガンダ雑誌である。本誌はソ連で創刊された『USSR in construction』に影響を受け、フォトモンタージュの手法で視覚的に国力をアピールした。それまでのグラフ雑誌とは異なり、文字数を減らし、複数の写真を組み合わせたダイナミックな誌面は、たいへん画期的であった。表紙はオフセットまたはグラビアで印刷され、本文ページはグラビア二色刷りである。本誌の発行当時、日本は既に多くの物資が不足していたが、使用した紙や資材は、軍の特需扱いで用意された。対外国向け宣伝誌のため、多いものでは一五か国語で出版された。

②西洋の書物

アシェンデン・プレスによる『ダンテ著作集』（一九〇九年）は世界三大美書の一つだといわれている。産業革命以後のイギリスでは、日用品の粗製乱造を憂い、手仕事の価値を見直す運動がさまざまな分野で起きた。印刷・出版においても、機械を用いる大量生産とは一線を画すプライベート・プレス（私家版）が誕生した。ケルムスコット・プレス、ダヴズ・プレスと同様、出版物の質の高さを評価されるのが、アシェンデン・プレスである。設立者のセント・ジョン・ホーンビーは、独自の書体としてスビアコ体を作った。太く存在感のあるスビアコ体は好評を博し、多くの印刷物に使われた。

鑑真と唐招提寺の研究　眞田尊光著　1,200円
日本中世の村と百姓　鈴木哲雄著　1,200円
近世村落の領域と身分　関口博巨著　1,200円
近世旗本領主支配と家臣団　野本禎司著　1,200円
近世日朝関係と対馬藩　酒井雅代著　9,350円
近世日本の災害と宗教　呪術・終末・慰霊・象徴　朴　炳道著　13,200円
京坂キリシタン一件と大塩平八郎　史料と考察　宮崎ふみ子編　13,200円
考証の世紀　十九世紀日本の国学考証派　大沼宜規著　11,000円
世界の中の近代日本と東アジア　対外政策と認識の形成　大日方純夫著　10,000円
横浜正金銀行の研究　外国為替銀行の経営組織構築　白鳥圭志著　8,800円
昭和戦時期の娯楽と検閲　金子龍司著　9,900円
手引ろくろの文化史　その技術と木地屋の系譜　小椋裕樹著　13,200円
吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税込

『FRONT』

『ダンテ著作集』

③版画とポスター

〈神戸湊川 貿易製産品共進会〉（一九一一年）は、北野恒富が描き、日本精版印刷にて描画平版で製版されたポスターである。日本画家である恒富は、新聞小説に挿絵を描き、後に美人画家として注目を集め、多くのポスターを残した。大正美術会や大阪美術会を創設、画塾白燿社を主宰するなど、大阪画壇の重鎮として活躍した。このポスターには当時流行したアール・ヌーヴォーの代表的作家の一人、アルフォンス・ミュシャの影響がうかがえる。

④印刷道具と機械

フィギンズ社製活字（一八四〇～一八九〇年代頃）はヴィンセント・フィギンズによって作られた活字である。フィギンズ社は一七九二年にイギリスで創設された活字鋳造工場で、多くの装飾活字を製作した。活字の側面にはFiggins のピンマーク（活字鋳造所を示す文字）が刻印されている。当館では二種類の書体を所蔵する。一つは魚尾状スタイルのセリフ（欧文活字の始点または終点にある飾り）を持つ装飾活字TUSCANのバリエーションとして作られたもの。もう一つは、鋭い楔形のセリフによって特徴づけられるWIDE LATIN書体の活字で、一九世紀後半に広告やディスプレイなどに使用された。

〈神戸湊川 貿易製産品共進会〉

フィギンス社製活字

古典籍や洋書を収蔵する文庫や図書館は全国に存在する。それらの資料に加えて、タイポグラフィーに関係する書物、日本や西洋のポスター、そして、活字や印刷機など印刷の道具や機械を収蔵していることは、当館のコレクションの特徴である。リニューアルした展示の見学とあわせて、本書もぜひ手にとってご覧いただきたい。

特集＊印刷文化と印刷博物館

印刷の歴史と技を学ぶ——展示のリニューアル・プロジェクト

山口美佐子（印刷博物館　学芸員）

リニューアルの経緯

印刷博物館（図1）は二〇〇〇年一〇月、凸版印刷株式会社の創立一〇〇周年の記念事業として設立された。企業博物館であるものの、広く一般の方々に印刷そのものの歴史や社会的役割、技術などについて紹介する施設として開館した。二〇一九年までは、五つのテーマ「印刷との出会い」「文字を活かす」「色とかたちを写す」「より速く、より広く」「印刷の遺伝子」に基づき、古今東西の印刷を紹介してきた。テーマ展示はどこから見てもよい気軽さがある反面、印刷の流れがわかりにくいという指摘もいただいてきた。

図1　印刷博物館エントランス

また、より多くの情報を提供できるようモニターによる映像解説を採用していたが、視聴に時間がかかるため、グラフィックや文字による解説を求める声も数々いただいてきた。

展示リニューアルについて

二〇二〇年、開館二〇周年を機に展示室を中心に大幅な改変を行い、一〇月六日にリニューアルオープンした。新たな常設展は「印刷の日本史」「印刷の世界史」「印刷×技術」の三つのゾーン（図2）で構成されている。

日本における印刷の形成、発展の歴史を紹介する「印刷の日本史」をメインとし、「印刷の世界史」では印刷の広がりや発展をグローバルスケールで体感できる年表形式で紹介。いずれも時代順に印刷を紹介する展示へと大きく変

更した。一方、「印刷×技術」ゾーンは、技術に特化し、印刷の基本要素や、様々な製版方法による印刷表現の違いを紹介している。

図２　印刷の日本史

印刷の日本史（図２）

印刷の歴史や発展の道筋は、日本と西洋では異なる。開館から二〇一九年までは、古今東西の印刷についてテーマごとに紹介していたため、日本の印刷史を流れで追うことが難しかった。日本にある印刷の専門博物館であるからには、日本の印刷の流れをきちんと紹介したい。そんな思いで、リニューアルでは印刷の歴史やその拡がりがわかるよう時系列展示とした。そして、資料が誕生した社会的な背景や技術的な側面について、図や年表などのグラフィック解説を主に、適宜映像やＣＧなどを用いて、コト情報の紹介にも力を入れた。資料そのものの解説は展示ケース脇に設置されたタブレットにおいて日本語、英語、中国語、韓国語の四カ国語で読めるように準備をした。

ここでは、時代を「古代・中世（七一〇～一五七〇年）」「近世（一五七〇～一八六七年）」「近代（一八六七～一九四五年）」「現代（一九四五年～）」と四つに区分し、その下に一六のテーマと四つのコラムを設ける構成とした（表１）。

「印刷の日本史」は奈良時代から始まる（図３）。日本の印刷の歴史は古く、七六四～七七〇年に称徳天皇の発願によって印刷された「百万塔陀羅尼」（図４）は、現存する

表１　印刷の日本史構成表

時代	大テーマ	中テーマ	
古代・中世 710 ～ 1570	宮廷と寺院から始まる印刷	1	奈良時代に始まった印刷
		2	寺院で本格化した印刷
		3	五山版と地方版
近世 1570 ～ 1867	民間へ拡がる印刷	4	活字誕生の背景
		5	上方で始まった版元の印刷
		6	江戸で成熟した印刷・出版
		7	学び手の拡がり
		8	江戸時代の銅版画
		9	情報を伝える摺物
		コラム１	鎖国の嘘
近代 1868 ～ 1945	印刷産業の近代化	10	新時代到来を告げる印刷物
		11	木版から活版へ
		12	お雇い外国人と図版印刷
		コラム２	近代教育と教科書
		コラム３	和装本と洋装本
		13	マスメディアの発達
		14	近代化を支える印刷
		コラム４	戦争と印刷
現代 1945 ～	消費社会と印刷	15	広告・販促メディアの発展
		16	出版メディアの躍進

世界最古の印刷物といわれている。天皇によってはじめられた印刷は、当初、知識と技術を兼ね備えた寺院を中心に行われたが、近世にかけて武士や一般庶民へと担い手が拡がっていった。それに伴い印刷地は上方から地方へ、読者層の拡がりに伴って内容も宗教や思想書から読み物などへ多岐にわたっていった（図5）。

近代以降は政府による殖産興業の推進により、外国から新たな技術が導入され、印刷産業は近代化し発展した。ここでは、政治や経済、社会において欠かせない印刷の役割を紹介している。例をあげると、国の通貨である紙幣の印刷（図6）や、新聞や雑誌などのマスメディアとしての印刷の姿である。そして印刷は、消費社会を支える役割を拡大しつつ現代に至っている。

資料としては、日本最初期の活字で徳川家康がつくらせた、重要文化財「駿河版銅活字」（一六〇六～一六一六年）（図7）や、日本で最初期の本格的な多色刷り石版印刷物「玉

図3「奈良時代に始まった印刷」

図4「百万塔陀羅尼」

図5「江戸で成熟した印刷・出版」

図6「お雇い外国人と図版印刷」

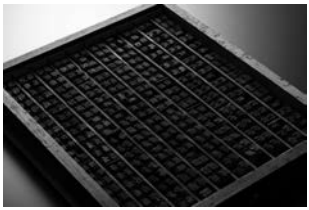
図7　駿河版銅活字

対米従属の構造

古関彰一　指揮権密約、沖縄返還と核密約、憲法改正案、安保を支える国体思想まで。「安保第一、憲法第二」の深層。¥3960

ナチス絵画の謎

逆襲するアカデミズムと「大ドイツ美術展」

前田良三　ナチス美術とは何であったか。ツィーグラーの絵画『四大元素』解読を軸に、全体像に迫る文化史的考察。¥4180

アマルティア・センの思想

政治的リアリズムからの批判的考察

ハミルトン　気鋭の政治学者が広大な思想のエッセンスを抽出し、政治理論の文脈で捉える最良の入門書。**神島裕子訳** ¥4620

リターンズ

二十一世紀に先住民になること

クリフォード　『文化の窮状』『ルーツ』につづく新展開。歴史のリアリズムに基づき伝統的未来を予見する。**星埜守之訳** ¥5940

アーカイブの思想

言葉を知に変える仕組み

根本彰　日本にアーカイブ文化が根づかない、その要因を西洋の思想・文学・教育史から探り、これからのあり方を示す。¥3960

共感と精神分析

心理歴史学的研究

北村隆人　共感は私たちの心に何をもたらすか。精神分析家たちの生涯をたどり共感の本質的困難さと意義を考え直す。¥7480

デヴォン紀大論争

ジェントルマン的専門家間での科学知識の形成

ラドウィック　一次資料を詳細に追い、新たな科学知識形成の過程を物語的叙述で再構成。科学史の大著。**菅谷暁訳** ¥19800

東京文京本郷2丁目20-7　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税込）
www.msz.co.jp

堂富貴」（一八七七年）（図8）など、印刷史においてエポックとなる資料も展示している。

図8　玉堂富貴

図9　印刷の世界史

印刷の世界史（図9）

印刷の歴史上で有名な出来事、というと真っ先に思い浮かべるのが一五世紀半ばのグーテンベルクの活版印刷術の発明であろう。しかし、これまで述べたように、印刷の歴史はグーテンベルク以前から始まっている。中国では、印刷に不可欠な紙や墨が紀元前には発明され、活字についても一一世紀には膠泥活字を、一四世紀には木活字を使って印刷したとの記録がある。また、朝鮮でもグーテンベルクより先立つこと八〇年余り前の一四世紀末には銅活字によって印刷が行われている。図版印刷では一八世紀末に現在のオフセット印刷につながる石版印刷がドイツで、活字と一緒に組める木口木版印刷が同じ時期のイギリスで発明された。

ここではアジアを含めた広く世界の印刷について、一つ一つの発明や印刷などの事象、それらが集まって大きな流れとなり、歴史的出来事や転換点となる様子を、壁一面を使った大きなグラフィック年表で概観できるように仕立てた。各時代を代表する印刷物などの資料は、腰の高さに設置した展示ケース（図10）に収めている。資料のキャプションでは隣接する「印刷の日本史」で展示されている、同時代の日本の印刷物を紹介し、印刷の世界史と日本史を横断して、展示を楽しんでもらえるよう心掛けた。

図10　印刷の世界史　資料展示

印刷×技術（図11）

常設展の三つ目のゾーンであるこちらは、印刷の技術に特化した展示である。①印刷の基本（工程や四要素）、②四つの版式と製版方法、③印刷機の種類、④色の再現、⑤濃淡の再現、⑥ＤＴＰとデジタル印刷について、壁面のグラフィックや映像、模型などで紹介している。特に再現装置では色分解のしくみや、網点の作り方などを装置でわかりやすく紹介している。

②四つの版式と製版方法については、ステージ展示（図12）で凸版、凹版、平版、孔版の四つの版式ごとに、手工的製版、写真的製版の二つの方法で製版された版とその印刷物を実際に見比べてもらい、印刷表現を比較できるようにしている。身近な版式だと、孔版の手工的製版では謄写版（ガリ版）を、写真的製版ではシルクスクリーン（プリントゴッコ）を紹介している。なかなか製版方法を理解するのは難しいが、その工程を映像でも紹介しているので、ぜひ観ていただきたい。

［付記］当館では新型コロナウィルス感染拡大防止対策として、①事前予約制による来館人数の制限・管理、②入館時の検温とアルコール消毒、③施設の定期的なアルコール消毒、④体験型展示の休止、⑤タブレット解説を休止し、手持ちのスマートフォンで二次元コードから解説を読み取る仕組み（日本語・英語）を実施している。残念ながら休止せざるを得ない展示も一部あるが、安心安全な環境を確保しているので、ぜひ多くのお客様にご来館いただきたい。

図11　印刷×技術　壁面展示

図12　印刷×技術　ステージ展示

知泉書館

＊ 創立 20 周年 ＊

ヘーゲル全集〔全 19 巻・24 冊〕

10 巻 1　『論理学』存在論（第 1 版）
久保陽一編集 菊 /436p/6000 円

11 巻　ハイデルベルク・エンツュクロペディー（1817）
山口誠一編集 菊 /688p/9000 円

8 巻 1　精神現象学 I
山口誠一編集　（近刊）

15 巻　評論・草稿 II（1826-31）
海老澤善一編集　（近刊）

知泉学術叢書〔既刊 14 点〕

パイデイア（上）
ギリシアにおける人間形成
イェーガー／曽田長人訳
新書 /864p/6500 円

能動的綜合
講義・超越論的論理学 1920-21
フッサール／山口一郎・中山純一訳
新書 /316p/3600 円

クラウス・リーゼンフーバー小著作集〔既刊 6 点〕

VI キリストの現存の経験
四六 /288p+ 口絵 8p/3600 円

数理経済学叢書〔既刊 10 点〕

意思決定理論
林 貴史著　菊 /252p/4500 円
【第 63 回日経・経済図書文化賞受賞】

ヨハネ福音書注解〔全 3 巻〕
伊吹 雄著　5000 ～ 7600 円

エックハルト　ラテン語著作集〔全 5 巻〕
中山善樹著　6000 ～ 9500 円

オッカム『七巻本自由討論集』註解〔既刊 3 巻〕
渋谷克美訳註　各 4500 円

デカルト全書簡集〔全 8 巻〕
山田弘明他訳　6000 ～ 7000 円

東京都文京区本郷 1-13-2（税別）
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
http://www.chisen.co.jp

書体の魅力を体感する——印刷工房の欧文書体アーカイブ

早川知子（印刷博物館　印刷工房インストラクター）

世の中にはさまざまな書体が存在する。私たちがＰＣのフォントシステムから選択できる書体は、いまや数えきれないほど増えている。それらは、どんなに珍しく斬新なものであれ、およそ五千年前から脈々と受け継がれてきた文字の歴史の一部だ。

活版印刷術は、今から五五〇年以上前に確立されて以来、あらゆる文字の形を書体として定着させ、それらをシステムとして整備する役割を果たしてきた。組み換え可能な活字によるこの技術は、現在では古くて珍しい印刷方法といわれるが、そのシステムの一部はデジタル化した現代社会でも引き継がれ活用されている。その恩恵として、今日の私たちは石彫やカリグラフィの経験が無くても、さまざまな形の文字を気軽に使うことができるのである。

このような書体の歴史の重要性から、二〇二〇年の印刷博物館リニューアルにおいては、開館以来二〇年の間に印刷工房が培ってきた欧文活字書体に関する調査・研究内容を常設展の新コンテンツとして公開することになった。それが「印刷工房の欧文書体アーカイブ」展示である。ここでは、その内容を紹介する。

印刷工房の活動概要

印刷工房は活版印刷の保存・伝承を目的として、印刷博物館の常設展示室内に造られた施設である。動態保存という手法を取り、収蔵品である活字へ実際にインキを付け印刷までを行う。名刺やはがきといった小さなものからポスターなどの比較的大きなものまで、多種多様な活版印刷を行うための道具や機械が揃えられている。中でも多くのスペースを占めるのが活字である。和文については、明朝体、ゴシック体を中心に、正楷書体や教科書体、アンチック体などを収蔵。一方、欧文については、ガラモンやボドニ、

アクチデンツ・グロテスク、フツーラ、ユニバース、パレス・スクリプト、クラレンドンなど、六〇〇書体以上もの活字を収蔵している。

印刷工房のインストラクターは、これらの活字を活用した来館者向けワークショップを設計し運営することで、活版印刷の教育・普及活動に取り組んでいる。

新コンテンツ公開の経緯

印刷工房には、以前からさまざまな活字の調査資料が存在した。活字の印刷見本である清刷りをファイリングしたものや、活字の保管場所、活字の数量を記した表、活字の購入元とオリジナルをデザインした鋳造所情報など、多岐に渡る。これらの資料は分散しており、一部エクセルなどでデジタル化されている資料もあったが、ほとんどはアナログで管理されていた。

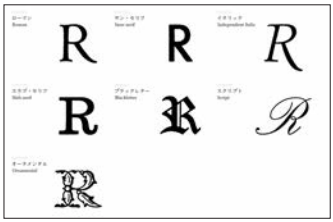

図1　欧文書体の七分類

印刷工房のインストラクターは、ワークショップを設計する際に活字書体を選定するとなると、複数の資料を参照しなければならず、さらに歴史的背景の情報もその都度書籍で補完していた。

そこで二〇一七年より、これらすべての調査資料の一本化とデジタル化を目指すことになった。それが「印刷工房の欧文書体アーカイブ」の始まりである。

データベース化

まずは分散したアナログの資料を一つのエクセルデータとして統合することからスタートさせた。重複情報を整理した上で、現物調査も行いながら情報を精査し、デジタル化していく作業である。この時点で、書体の分類法も設定した。歴史上さまざまな分類法がある中で、印刷工房で使用しやすい七分類を採用することとした（図1）。この分

新刊案内

吉原直樹・橋本和孝・今野裕昭 編著　A5判・三一〇頁・定価8580円
グローバル化時代の海外日本人社会
越境の変容とゆらぐ日本人社会を前にして、長い間自明のものとされてきたカテゴリーの有効性が根底から問われている。それは対象に向き合う研究者のポジショニングのありようが問われることになる。
執筆者　倉沢愛子・川口幸大・高橋一得・三浦優子・内田真仁・松本尚之・新田目夏実・水上徹男・三浦倫平・速水聖子・三宅和子

花井みわ 著　A5判・三三六頁・定価1210円
「辺境」の文化複合とその変容
―東アジア文化圏を生きる中国朝鮮族
満洲は移民の地であり複数の民族の生活空間があった。多くの朝鮮人が満洲に渡った。移住先の満洲で、中国人そして日本人とどう向き合いながら生きてきたのか。今日、日本・中国・韓国の歴史認識をめぐる対立の多くは満洲から始まった。

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751

類はさらに細分化した一九のスタイルから構成され、例えばローマン体のカテゴリーを、さらに細部の違いによって五つのスタイルに分類することができる。

出来上がったエクセルデータを専用アプリケーションにインポート。書体データベース、収蔵活字データベース、製作所データベース、人物データベース、画像データベースという五つのデータベースを内包する「欧文書体体系データベース」を立ち上げた。

平行して、清刷り資料のスキャニングを進行した。スキャニングの主な目的は、データベース上で文字画像のサムネイルを表示させることである。今回は、アルファベットの中から「R」の文字を選出し、書体毎に異なる直線や円弧の表現を認知しやすくした。

このようにして、テキストと画像、双方のデータが集積された。そして、これらをもとに制作されたのが、「印刷工房の欧文書体アーカイブ」展示（図2）となる。次からは、具体的な展示内容を紹介していく。

図2　印刷工房の欧文書体アーカイブ展示

年表グラフィック

印刷工房前の壁面に設置した大型パネルは、欧文書体をスタイルで分類した年表である。縦軸を「スタイル分類」、横軸を「書体のリリース年」として、収蔵する六〇〇種類以上の書体を配列している。カテゴリーは以下の七種、サン・セリフ、スラブ・セリフ、オーナメンタル、ブラックレター、スクリプト、インデペンデント・イタリック、ローマンである。そして、それぞれをいくつかのスタイルに細分化させ、年表の縦軸を25行に分割した。さらに、未所蔵ながら系譜上重要な書体は赤色で追記し、復刻や同時代の影響関係などを語ることができるようにしている。

出来上がった年表を眺めると、ローマンよりも後の時代から出現したサン・セリフが産業革命の進行とともに増していく様子などが見てとれる。

タブレット端末

年表の手前左手には、データベースを閲覧できるタブレット端末を用意している。コンテンツには、デジタル年表や一覧表などから個別の書体情報を調べることができる検索ページ、書体の定義や各スタイルの特徴、活字の各部の呼び方などを知ることができる学習ページなどがある。

デジタル年表では、縦軸を「書体が生まれた国別」にスイッチすることもできる。ドイツで確立された活版印刷術

が、近隣の国々へ伝播していき、それぞれの土地で独自の進化を遂げていくなど、こちらの切り口にもさまざまなストーリーを見出すことができる。

書体の個別ページでは、製作所や製作者情報、書体の解説文を閲覧することができる。解説文の執筆も印刷工房のインストラクターが担当したものだ。グラフィックデザイナーで武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科教授の白井敬尚氏に全面的な協力をいただきながら、それぞれ二〇〇文字程度の解説をつけている。アルファベット文化圏の情報をどのように日本語表記していくか、専用の校正ルールを設定することも必要で、こちらにも多くの時間を費やした。また、壁面の年表グラフィックにおける掲載位置が照合できる機能も追加し、タブレット端末と年表グラフィックをリンクさせるようにした。視野の切り替えができる展示を目指した形である。

図3　関連資料「聖歌（筆写譜）」（左）と「イタリアの初期印刷本（零葉）」（右）

資料展示

年表グラフィック手前右手に構えた展示ケースでは、関連資料を紹介している（図3）。

「聖歌（筆写譜）」は、ヨハネス・グーテンベルクによる活版印刷術が確立する以前、一四世紀～一五世紀頃の北フランスで書かれた文字の資料である。活字の歴史以前には、手書きをはじめとする文字の長い歴史があった。羊皮紙に羽ペンで書かれたものや石彫、金属加工によって形作られた文字の形状。これを再現し量産を実現したのが、活版印刷術である。本資料は活版印刷術確立頃のもので、右上へ跳ね上がるメリハリのついた筆跡は、グーテンベルクが印刷した「ブラックレター」というカテゴリーの書体に通じている。

活版印刷術初期のローマンスタイルの中で有名なニコラ・ジャンソンによる活字の資料（「イタリアの初期印刷本（零葉）」ニコラ・ジャンソン印刷　一四七〇年代）も展示している。

また、印刷工房で組版を行った色々なスタイルの活字と、そこへ実際にインキをつけて印刷した清刷りも展示した。金属活字が生み出す繊細で力強い表現を間近でご覧いただければ幸いである。

今後の活用

今回ご紹介した「印刷工房の欧文書体アーカイブ」は展示コンテンツであると同時に、データベースでもある。今後は、調査・研究を深化させながら更新していくとともに、その活用が求められる。

イベントでの積極的な活用や、ＳＮＳ、Ｗｅｂコンテンツとして、館外へも広く発信していきたい。

特集＊印刷文化と印刷博物館

進化する印刷博物館——過去・現在・未来

宗村 泉（印刷博物館 副館長）

印刷博物館設立までの軌跡

総合研究所内の「印刷史料館」

わが国の印刷博物館設立に関する動きは一九二〇年頃からあったようだが、具体的には一九四〇年の東京オリンピック開催に合わせて当時の印刷工業会が印刷博物館開設の計画を立案した記録がある。しかし戦争のためオリンピックは開催を返上し、同時に印刷博物館の計画も幻となった。戦後になっても施設設立の提案、提言はあったが実現することはなかったものの、一九八〇年代になると印刷文化や歴史に関する施設が印刷企業や地方新聞社、印刷関連メーカーなどによって開設されていった。

一九八七年に印刷博物館の前身である「印刷史料館」が開館した。当社の八五年史を編纂した際に、社内外から集まった印刷史料を散逸させないようにと、当社の総合研究所内に開設した約四〇〇㎡の展示室から成る非公開施設であった。展示品は社史に関する印刷史料、機器類に加えて、以前から所有していた重要文化財の駿河版銅活字や『百万塔陀羅尼』などの貴重な史料も展示していたが、展示環境はショウルームの域を出ないものであった。一九九〇年に入ると社内外で不要となった機器や印刷物などの寄贈が相次ぎ、収蔵するだけではなく、一九九二年からは小規模ながら明治期の美人画ポスターなどの企画展を開催した。

以下、印刷博物館が開館するまでの五年間の準備期間を

	印刷との出会い	文字を活かす	色とかたちを写す	より速く、より広く	印刷の遺伝子
社会	印刷と祈り	社会を動かす印刷の力	図版が広げた知識	産業の中の印刷	・デジタルに受け継がれた印刷 ・オフセットとグラビア印刷 ・新しい文字表現 ・進化するミクロワールド ・特殊印刷の世界
技術	印刷とは何だろう	多数を生み出す技術	見せる技術の仕組み	加速する印刷技術	
表現	数が生み出す世界	活字を用いた伝達表現	わかりやすい表現の追求	ポスターに見るグラフィックデザインの流れ	

振り返ってみる。

〈一九九五年〜二〇〇〇年〉

一九九五年、小石川再開発計画に印刷博物館、音楽ホールといった文化施設を併設する計画が立ち上がり、一九九六年には広報部内に印刷博物館設立準備室が設置され、スタッフ四名で準備をスタートする。同じく記念事業である『印刷博物誌』の編纂検討会にも参加し、一九九七年には社外有識者をメンバーに加えた印刷博物館コンセプト検討会を立ち上げ、同年より欧米、アジアなど一四か国の印刷関連施設を視察する。展示の方法は「机型展示」、情報は「モニター配信」、内容は「コラム展示」と決定。一九九八年には文化庁、東京国立文化財研究所より指定物件展示可能施設として認定される。同年準備委員会を設立し展示内容の検討を開始。

館内の展示は大きく五つの時代区分（印刷との出会い、文字を活かす、色とかたちを写す、より速く、より広く、印刷の遺伝子）と三つの意味区分（社会、技術、表現）とで構成する方針を決定し、それに沿って具体的なテーマを決めていった。上図はその一三のマトリックスに分類されたテーマである。時代区分の現代に当たる「印刷の遺伝子」では、社会、技術、表現を区分することが困難であったので一つの括りとして扱った。

一九九九年、クリエイターの粟津潔が初代館長に就任。また同時期に蔵書数約五万点のライブラリーを計画。建築関係、展示関係者と展示空間と什器の計画を進める。二〇〇〇年三月に設立に関するプレス発表。四月には館内に学芸企画室を設置。六月展示工事開始。一〇月六日に開館レセプション、一〇月七日に一般公開となった。

印刷博物館の意義

設立準備初頭で印刷博物館の活動方針や展示内容を考える前に、開設理由や意義が必要だということになり、その検討を進めた結果、二つの大きな理由が見えてきた。

一つ目は、世界がデジタル化に大きくシフトしはじめた時代を迎えたこと。二〇世紀末は、デジタル化の大きな波が各分野に波及し、印刷分野でもそれまでアナログで対応していた様々な技術や表現が次々にデジタル化された時代である。デジタル化の加速度的な進展によって、アナログ時代に培われてきた技術や表現がいとも簡単に失われることは、現在もまた将来的にも大きな危機であり、誰かがどこかでこれらを保存伝承していく必要があると判断した。

二つ目は、印刷を文化的な側面からアプローチする印刷文化学の構築である。人々にとって「印刷とは何か」を明らかにするためには、進化をし続ける技術的な側面だけではなく、文化的な側面という印刷の持つ本質を追究することが必要なことは、印刷史料館の活動をはじめこれまでの調査・研究を通して気付かされた。そのために当館が独自に印刷文化学という学問体系を構築して、この博物館の使命として印刷の本質を追究することを目指すことにした。

この印刷文化学は、現代と将来の情報メディアのあり方を模索する上で重要な指針となり、その成果から見えてくるものが「印刷とは何か」の答えを示すものなのではないかと当初は考えたのである。そこでこの変革の時期こそ、印刷の社会的役割をしっかりと後世に伝える必要があるという結論に達した。そして企業博物館のスタンスとして、調査・研究の範囲を印刷文化と歴史全般として、展示や活動内容は社会一般をターゲットとした公共的な博物館を目指すこととした。

開館後の活動

〈二〇〇〇年～二〇〇四年〉

二〇〇〇年一〇月七日印刷博物館は開館し、その後五年間で、「江戸時代の印刷文化――徳川家康は活字人間だった!!」を皮切りに、二〇〇二年四月の「ヴァチカン教皇庁図書館展――書物の誕生　写本から印刷へ」、二〇〇三年の「一九六〇年代グラフィズム」、「活字文明開化――本木昌造が築いた近代」など矢継ぎ早に八本の企画展を開催する。文化施設としての地位確立を目指し、外部の協力を得ながらハイペースで走り抜けた五年間であったが、この時期に取り組んだ成果がその後の活動指針となり社会的な評価を得ることとなった。

〈二〇〇五年～二〇〇九年〉

続く五年間では九本の企画展を開催。二〇〇五年四月からの「印刷革命がはじまった――グーテンベルクからプランタンへ」は、ベルギーアントワープ市のプランタン＝モレトゥス博物館との共催企画展として開催した。一〇月一日、東京大学名誉教授の樺山紘一が二代目館長に就任。

二〇〇六年一〇月はスタンホープ印刷機を中心に印刷機器をテーマとした「近代印刷のあけぼの――スタンホープと産業革命」展を開催。また二〇〇七年一月には、東京大学大学院情報学環の全面的な協力により「モード・オブ・ザ・ウォー　東京大学大学院情報学環所蔵　第一次世界大戦期のプロパガンダ・ポスターコレクションより」を開催。戦争と印刷をテーマにした企画展であった。その後の「美人のつくりかた――石版からはじまる広告ポスター」展と共に、手描き製版の原理など石版印刷の表現について紹介することができた。九月には日本書籍出版協会・日本雑誌協会創立五〇周年記念としての共催企画「百学連環――百科事典と博物図譜の饗宴」を開催。秋篠宮同妃両殿下のご

来臨を賜る。

二〇〇八年五月、企業系博物館の連環である「産業文化博物館コンソーシアム（COMIC）」を立ち上げる。当館が事務局となり、各企業博物館が持つ特徴や課題を発表し、議論する場として多くの施設が参加している。

同年九月「ミリオンセラー誕生へ！――明治・大正の雑誌メディア」を開催。近現代の印刷文化がテーマの企画展が続いた。二〇〇九年七月「近代教育を支えた教科書――東書文庫コレクションを中心として」が開催される。

〈二〇一〇年～二〇一四年〉

この五年間では四本の企画展を開催。九月には来館者数三〇万人を迎えた。二〇一一年三月一一日、東日本大震災が発生。館内の被害はなかったが、この震災を教訓に災害時の対応、対策が検討された。四月には「空海からのおくりもの――高野山の書庫の扉をひらく」を開催し高野版を中心に貴重史料を公開。また二〇一二年一〇月には東京の印刷産業の歴史的変遷をテーマとした「印刷都市東京と近代日本」展、二〇一四年にはお雇い外国人による近代日本の印刷表現を辿った「印刷と美術のあいだ」展など、これまでとは違う視点での企画展を開催することができた。

〈二〇一五年～二〇一九年〉

二〇一五年四月には「ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅱ――書物が開くルネサンス」を開催。前回のヴァチカン展と同様に多くの来館者を迎えた。二〇一六年は九月に五〇万人の来館者を迎え、一〇月からは大名など武士と印刷のかかわりを紹介した企画展「武士と印刷」が開催された。二〇一七年はキンダーブック創刊九〇周年を記念して、フレーベル館との共催で「キンダーブックの九〇年――童話と童謡でたどる子どもたちの世界」が開催され、一月には初めて天皇皇后両陛下の行幸啓を賜る。二〇一八年の秋には天文学と印刷の関連性を紹介した「天文学と印刷」展を開催。これがリニューアル前最後の企画展となった。

二〇一七年には当館の活動指針となるべく「印刷文化学」を構築するために、新たな外部ブレーンへの協力要請と、

AIの経済学
「予測機能」をどう使いこなすか
鶴 光太郎［著］●慶義塾大学大学院商学研究科教授
AIは我々の仕事を奪うのか？ それとも頼もしい味方なのか？ AIが経済社会に与える影響と可能性を、身近な事例で平易に解説。◎定価1870円（税込）

国際協力と想像力
イメージと「現場」のせめぎ合い
松本 悟・佐藤 仁［編著］
援助の現場においてイメージと現実はなぜ乖離するのか。援助国・被援助国の視点から要因を考察し、ギャップを超える方法を探る。◎定価2,200円（税込）

新装版 **ルベーグ積分入門**
使うための理論と演習
吉田伸生［著］
最小限の準備でルベーグ積分を使えるよう解説。具体的な応用例でその威力を体感でき、豊富な練習問題で自習書としても最適。 ◎定価3,960円（税込）

私の科学者ライフ
猿橋賞受賞者からのメッセージ
女性科学者に明るい未来をの会［著］
優れた業績を挙げた女性科学者に贈られる「猿橋賞」。高校生・大学生や若手研究者に向けて、受賞者たちが研究者人生を語ります。◎定価2,090円（税込）

日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 https://www.nippyo.co.jp/

新しいフレーム策定のための検討会が開催された。そして二〇一九年一二月には、総合展示リニューアルのため開館後初の長期休館に入った。

印刷文化学を具現化するためのリニューアル

二〇二〇年初頭から展示場リニューアル工事のために休館となり、それが完了した一〇月に印刷文化学を三つの具体的な形として発信する計画を立案した。その内容は書籍『日本印刷文化史』の編纂発行、展示場の総合展の全面的リニューアル、そして印刷文化学の活動を象徴するマークの作成である。ここでは展示場の常設展リニューアルの概要を紹介する。

常設展の展示の考え方

■日本の印刷文化を世界とのつながりのなかで、総合的に学び、理解できる

印刷博物館が培った日本の印刷文化に関する有形・無形の資産を活かして、日本の印刷文化の歴史をさまざまな視点から掘り下げ、世界の印刷文化の歴史との関係から捉えなおして展示を構成することで、日本独自の印刷文化の姿として来館者に発信する。

■歴史の時間軸で人間と印刷の関係を辿り、私たちにとっての印刷を再発見できる

印刷文化を体系的、総合的に学べる場として、歴史の時間軸に沿った、一般来館者や子供たちに理解しやすい展示とした。時代とともに拡大、多様化してきた人間と印刷の関係をたどり、理解するとともに、現代社会の隅々に浸透した印刷の姿を再発見することができる。

■歴史の中から、私たちにとっての印刷の普遍的意義と可能性がわかる

私たちの周りのコミュニケーション・メディアが大きく変化するなか、印刷の歴史を振り返ることで、人類の社会の発展のなかで印刷が果たしてきた役割がわかり、来館者が印刷の普遍的な意義と可能性を実感できる展示としての機能を強化した。

印刷文化学構築と展示リニューアルの工程

〈二〇一三年〜二〇一五年〉

二〇二〇年の「印刷文化学」の構築と展示リニューアルを目指して、館内学芸員が中心となりプロジェクトを立ち上げる。二〇一五年には、日本の印刷文化史をテーマとした書籍の作成を決定し、その骨子案をまとめる。

〈二〇一六年〜二〇一八年〉

二〇一六年には外部ブレーンとして学識経験者、印刷史研究者、編集者、クリエイターによる検討委員会を組織し、リニューアル後も東洋から世界の印刷文化へと順次領域を広め進化した印刷文化体系の構築を目指す。一〇月に第一回検討委員会を開催し「印刷文化学」全体計画を示して意

見交換を行う。

二〇一七年には書籍『日本印刷文化史』の内容の検討を開始し、各学芸員が執筆を開始する。二〇一八年には博物館の新しいVIマニュアルなど検討し、リニューアルに向けての体制を発表する。

〈二〇一九年～二〇二〇年〉

『日本印刷文化史』のデザイン、『印刷博物館コレクション』の内容、常設展リニューアルの方向性を説明し委員会として検討。一一月には展示リニューアルの内容を説明し方向性を決定。二〇二〇年から休館となり本格的に工事が開始されるも、四月には新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発出され工事が中止。再開館予定の六月から展示工事が再開したために開館は一〇月に延期となる。一〇月五日に内覧会を開催し、翌六日から予約制で一般公開となる。

これからの印刷博物館

これまで我々は、印刷の本質にアプローチするために企画展の実施や調査・研究活動、教育やイベント活動を行い、それらの活動を通じて多くの知見、経験を深めることができた。しかし印刷文化学の構築を具現化することは難事業であり、今回のリニューアルにより印刷文化学の端緒を紹介することができた。

印刷文化学は、印刷博物館が今後活動を継続していくためのキーコンセプトであり重要な指針でもある。それに基づいて発信されるコンテンツは、普遍的な価値を持った成果と言えよう。そしてこの新しいコンテンツを今後どのように展開、活用していくのかが当館の大きな課題である。

例えば、企業博物館や公立博物館など他の外部施設との調査・研究や共催企画展の素材として、または組織や世代を超えた学芸員・研究員同士の研究テーマとして、協業のために活用できたらと考える。

そして印刷博物館の展示コンテンツが向かう次のステージは、印刷の歴史と文化の発祥の地である東アジアをはじめとしたアジア全域を対象とした考察となろう。さらには近代世界をリードするに至ったヨーロッパの印刷文化の根本的な理解である。これらのことは引き続き調査研究を続けて、将来的にはわが国の印刷文化との関わりの中で検証し構築していきたいと考えている。

当館は凸版印刷が設立運営している企業博物館であるが、企業の社会文化貢献の一つの形態、一つの成果として、これからも一歩踏み込んだ活動を展開していきたい。

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

十二月一一日（金）
　電子書籍セミナー『電子書籍市場の現状と販売方法について（実践編）』（丸善雄松堂・メディアドゥ）／営業部会
十二月一八日（金）編集部会
十二月一八日（金）
　第六回オンラインセミナー『コロナ禍の出版業界：書店・取次・出版社はどう動いた？』講師：古幡瑞穂（日販マーケティング部）／営業部会

二〇二一年
一月二二日（金）営業部会
一月二九日（金）第七回　理事会
二月一〇日（金）編集部会
二月一九日（金）第八回　理事会
二月二六日（金）
　第七回オンラインセミナー『ケーススタディ　慶應義塾大学出版会のウェブプロモーション』講師：福本友音（慶大）／営業部会

訃　報

二〇二〇年一二月四日　三重大学出版会社長　濱森太郎先生（三重大学人文学部名誉教授）がご逝去されました。ご功労に敬意を表しますとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

北海道大学出版会

▼「地震による地すべり災害」刊行委員会編**『地震による地すべり災害―二〇一八年北海道胆振東部地震』**（B5判・三七〇頁・六九三〇円）地すべり学会・応用地質学会の調査に基づき、発生メカニズム、地形・地質、被害状況、地域毎の事例を分析。行政による対応も掲載。

▼金子勇著**『ことわざ比較の文化社会学―日英仏の民衆知表現』**（四六判・二二八頁・三三〇〇円）これからの「少子化する高齢社会」に活かせる知恵をどう受け継ぐか。一一〇のことわざに示される民衆知を比較社会学の視点から読み解く。

▼服部英二著**『地球倫理への旅路―力の文明から命の文明へ』**（四六判・三〇八頁・三〇八〇円）。ユネスコで「文明間の対話」を発信した著者が、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」の基礎となる哲学に至った知の出会いを語る。

▼S・ダーン著／本間研一訳**『人間の内なる時計―体内時計を発見した男　ユルゲン・アショフの生涯』**（B5変判・三二八頁・七七〇〇円）。アショフの伝記であると共に、時間生物学の歴史でもあり、これまでの研究のレビューでもある。

弘前大学出版会

▼嶋昭紘監修／柏倉幾郎編著『**福島に学ぶ　放射線総合科学の展開を目指して**』（A5判・一七〇頁・一六五〇円）東日本大震災から十年。福島第一原子力発電所事故のもと、現地での支援活動や情報発信に取り組んだ研究者たちの記録。今日まで続く弘前大学の被ばく医療の体制づくりや人材育成のあゆみを紹介。

▼Radiation Environment and Medicine 編集委員会編『**Radiation Environment and Medicine Vol. 10 No. 1**』（A4変形判・五四頁・一二一〇円）被ばく医療に関わる最新の知見を網羅した総説や原著論文を中心に放射線科学の幅広い分野にわたる論文を掲載した英文学術誌。今号では、放射線生物影響、放射線計測等の7報の論文を掲載。

▼弘前大学出版会編『**弘前大学レクチャーコレクション　学びの世界へようこそ**』（A5判・三〇七頁・一七六〇円）大学ではどんなことが学べるの？　どんな授業をしているの？　やさしくわかりやすい語り口で、バラエティーに富んだテーマから大学で学ぶことの楽しさを紹介している。大学での学びの導きに。

東北大学出版会

▼橋本功二著『**グローバル二酸化炭素リサイクル―再生可能エネルギーで全世界の持続的発展を**』（A5判・一四六頁・二七五〇円）再生可能エネルギーの余剰電力を用いた水の電気分解による水素の製造と、回収した二酸化炭素と水素の反応によるメタンの製造の研究開発過程を紹介。天然ガス発電にメタンを用い、再生可能エネルギーで発電した断続変動する電力を補って二酸化炭素をリサイクルしながら、高品質の電力を供給する。

▼東北大学日本語教材開発グループ著『**日本語初級から学ぶ日本文化**』（B5判・一〇二頁・二二〇〇円）日本語初級学習者のための教科書。日本語を身につける上では日本文化を学ぶことが重要であるという観点から、日本の社会慣習や伝統文化についての28のトピックを取り上げている。各課では平易な読解文を提示するとともに、学習者の活発なコミュニケーションを促し、相互の文化交流を可能にするタスクを設けている。利用者の学習意欲と学習効果を高めため豊富なカラー図版を収録し、「キーワードの漢字」やウェブ上の補助教材等も用意。

流通経済大学出版会

▼新井博・小谷究編著『**スポーツ技術・戦術史**』（A五判・二八〇頁・二二〇〇円）スポーツの個別史の研究に長い間取り組んできた研究者達が各種目の技術・戦術史で重要と思われているテーマや時期について、自由に取り上げた一冊。

▼川﨑愛著『**ハンセン病は人に何をもたらしたのか**』（四六判・三〇四頁・一三二〇円）療養所で暮らす病歴者の自発的な表現活動を通して「自己差別」から自身を解放し、社会を動かしていく道筋を明らかにする。

聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『**教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために**』（B5判・一四〇頁・一七六〇円）幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

▼宇佐美博子・河村久・神田由紀・黒須利夫・小林芳枝・長橋雅俊・松井孝夫・八木正一著『**教職実践演習**』（B5判・一四六頁・一七六〇円）中学校・高等学校教諭を目指す方に向け、教職課程の振り返りから生徒指導要録・通知表の記入の仕方まで解説。教職の魅力が満載。

▼髙橋裕樹著『**新しい時代のキャリアデザイン―自分の人生を自ら描くために**』（A4判・一六七頁・一七六〇円）全十五章構成で、記入式ワークシートを使いながら、キャリアデザインの基礎から応用まで段階的に理解を深める。「なぜ働くのか」を問いかけつつ、一人ひとりが激動の時代を乗り切り、力強く生きるための人生の羅針盤となる書。

慶應義塾大学出版会

▼柯隆著『**「ネオ・チャイナリスク」研究**』（四六判・三五二頁・二六四〇円）日本を抜き世界第二位の超大国となった中国は、世界覇権奪取へさらなる躍進を試みる。この強引な政策は日本や世界各国へも多大な影響を及ぼす。この新しい動きを「ネオ・チャイナリスク」と捉え、今後国際社会はどのような危険に直面するのかを、長期的な歴史観とともに解説するスケールの大きな現代中国論。

▼ジェニファー・ソール著／小野純一訳『**言葉はいかに人を欺くか―嘘、ミスリード、犬笛を読み解く**』（四六判・三二〇頁・三五二〇円）日常の嘘や方便から、政治スキャンダル、ヘイトスピーチまで幅広い事例を用いて、言葉が（ときに暗示的に）人を欺く仕組みと倫理を気鋭の言語哲学者がユーモアを交えて分析。「犬笛」を理論化する注目論文収録。

▼鄭鍾賢著／渡辺直紀訳『**帝国大学の朝鮮人―大韓民国エリートの起源**』（四六判・三五二頁・三七四〇円）近代日本のエリート養成所だった帝国大学で学んだ朝鮮人たちの足跡をはじめて明らかにする、韓国のベストセラー歴史書。

専修大学出版局

▼伊藤浩志著『**なぜ社会は分断するのか―情動の脳科学から見たコミュニケーション不全**』（四六判・三一二頁・三〇八〇円）災害は弱者を襲う。コロナ禍と福島原発事故、両者のつながりは何か。安全と安心の二元論を超えて、今あきらかになる排除されてきた「社会の病」の存在。社会の病をあぶり出し、コミュニケーション不全の原因を明らかにする。

▼島薗進著『**増補改訂版　つくられた放射線「安全」論**』（A5判・二六八頁・三〇八〇円）3・11福島原発事故から十年。二〇二一年の現在に至っても「被害がなかったことにされる」と感じている人は今も多い。なぜ、どのようにしてそんなことが起こったのか。本書は科学者・専門家の行動と言説という側面から、それを明らかにしようとする。

▼専修大学今村法律研究室編『**神兵隊事件　別巻九**』（A5判・四四八頁・六一六〇円）昭和八年七月に起きたクーデター未遂事件の資料集。「神兵隊事件予審訊問調書写　被告人鈴木善一」の後半部分を収録。

玉川大学出版部

▼竹中喜一・中井俊樹編『**大学職員の能力開発**』（大学SD講座4）（A5判・二〇八頁・二二〇〇円）研修設計や制度、組織づくりの方法など多くの視点から、大学職員の能力開発を多面的に理解できるよう解説した書。巻末資料も多数掲載。

▼佐藤浩章・栗田佳代子編著『**授業改善**』（シリーズ大学の教授法6）（A5判・二一六頁・二六四〇円）学生の学習意欲を喚起し、教員の教育スキルを向上させるために不可欠な授業改善。その具体的な方法やツールとともに、効率的で実践的なモデルを提案する。

▼高平小百合編著『**教えと学びを考える発達心理学**』（A5判・二二四頁・二六四〇円）教職に関わる様々な事柄を心理学の理論・知見から考えるシリーズ。将来教師を目指す学生が知っておくべき、幼児期から青年期までの発達について基礎から解説する。

▼近藤洋子編著『**「生命と性」の教育**』（A5判・二四八頁・二四二〇円）「生命」や「性」の教育について、豊富なエビデンスから正しく理解し知識を得ることができる教職テキスト。

中央大学出版部

▼植野妙実子著『**男女平等原則の普遍性―日仏比較を通して**』（A5判・五八二頁・七五九〇円）フランスでは近年、女性政策を充実させ男女平等を揺るぎないものとしたが、その足跡をたどりながら、日本での性別役割分担の意識改革、夫婦別姓や女性天皇等の容認のために何が必要か、憲法の基本に基づいて検討する好著。

▼畑尻剛著『**ペーター・ヘーベルレの憲法論―立憲国家における憲法裁判を中心に**』（A5判・一九八頁・二五三〇円）現代ドイツ憲法学の泰斗の一人ヘーベルレの多様で豊饒な憲法論を、憲法裁判を中心に様々なテーマで縦横無尽に語りつくす。著者四〇年の研究の集大成。

▼只木誠／グンナー・デュトゲ編『**終末期医療、安楽死・尊厳死に関する総合的研究**』（A5判・五二八頁・六九三〇円）世界各国で共通かつ喫緊の課題「終末期医療と法」をめぐる問題について、日独第一線の研究者によって人間の尊厳、治療中止、積極的臨死介助、患者の指示書（リビングウィル）、終末期医療、臨死介助協会の六テーマで比較法的観点から幅広く展開されたシンポジウムの記録集。

東京大学出版会

▼塩川伸明著『**国家の解体―ペレストロイカとソ連の最期**』（A5判・二三九四頁・四一八〇〇円）冷戦の中心であった特異な大国がペレストロイカと呼ばれる改革を経て解体する重大事件を歴史的に解明。第一人者の書き下ろしの集大成。

▼宋晗著『**平安朝文人論**』（A5判・三六二頁・五九四〇円）文章経国思想のもと文人が成立した嵯峨朝から漢文学が解体する院政期を対象に、文人たちが漢文を駆使して内面を表出させる営為を描ききった文学の精神史。【第一〇回東京大学南原繁記念出版賞受賞作】

▼河野哲也ほか編『**顔身体学ハンドブック**』（A5判・四六四頁・一三二〇〇円）意識的／無意識的に個人の来歴を表現し、他者に読み解かれる媒体である顔・身体の研究を体系的に集成。コミュニケーションの根源に迫る新たな学問の概説書。

▼加納靖之・杉森玲子・榎原雅治・佐竹健治著『**歴史のなかの地震・噴火―過去がしめす未来**』（四六判・二六〇頁・二八六〇円）歴史学と地震学が連携し、過去の大地震や火山噴火の実態に迫る。将来の災害予測につなげる文理融合の試み。

東京電機大学出版局

▼村山正・常本秀幸・小川英之著『**エンジン工学―内燃機関の基礎と応用**』（A5判・二八八頁・三六三〇円）内燃機関の基礎理論と最新の応用技術について、豊富な図と丁寧な解説でわかりやすく解説。地球環境に配慮した技術など、持続可能な社会の実現に向けた最新の技術についても体系立ててまとめた。

▼土肥紳一・大山実・紫合治著『**ためしながら学ぶC言語**』（B5判・二四〇頁・二八六〇円）はじめてC言語を学ぶ方向けにまとめたテキスト。「目的を達成させるにはどのようなプログラムを組んだらよいか」という視点から、課題を解きながらプログラミングを身につけることができる。また、IoT技術の入門として、実機（Raspberry Pi）を使用した組込み型プログラミングも学べる。

▼浅岡伴夫・松田雄馬・中松正樹著『**AI―リテラシーの教科書**』（B5判・二四〇頁・二八六〇円）AIの知識を正しく理解し、適切に使いこなす能力を伸ばすことを目的とした教科書。大学の半期で学べる章構成。文・理を問わず学習できるよう「関連用語集」も収録。

法政大学出版局

▼杉田俊介・櫻井信栄編／川村湊ほか編集協力『**対抗言論　反ヘイトのための交差路　2号―複合差別を解きほぐす**』（A5判・四〇二頁・二七五〇円）社会の分断や貧困拡大を助長する新自由主義や性差別、民族差別や優生思想などの〈複合差別〉を解体し、未来への知恵を探る。

▼P・ブローム著／佐藤正樹訳『**あるヴァイオリンの旅路―移民たちのヨーロッパ文化史**』（四六判・三六六頁・三七四〇円）偶然手に入れた名もないヴァイオリンの来歴を探る旅を通してヨーロッパ三〇〇年の歴史を描く、異色の文化史。

▼宇佐美達朗著『**シモンドン哲学研究―関係の実在論の射程**』（A5判・二九四頁・四九五〇円）ドゥルーズやスティグレールらに大きな影響を及ぼした哲学者の独特な諸概念による体系の成立過程を読解する、本邦初の画期的モノグラフ。

▼高屋敷直広著『**身体忘却のゆくえ―ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉**』（A5判・二六六頁・四一八〇円）ハイデガー存在論に対する〈他者の不在〉という根本的批判、〈共存在〉をめぐる倫理の難問に正面から取り組む。

武蔵野大学出版会

▼下條慎一著『**政治学史の展開―立憲主義の源流と市民社会論の萌芽**』（A5判・二〇八頁・二七五〇円）古代から近代までの政治学をたどりながら、近世の市民革命期における立憲主義の源流を探究しつつ、近代思想のなかに市民社会論の萌芽を見出して現代に架橋した。

▼阿部和穂著『**薬名「語源」事典**』（B5判・七六〇頁・七四八〇円）その薬はなぜその名前がついたのか？「語源」「歴史」「エピソード」から薬名の由来を解説。日本の医薬品一三二一点を網羅した、薬剤師国家試験対策にも最適な一冊。

武蔵野美術大学出版局

▼高橋陽一著『**チーム学校の教師論**』（A5判・三五二頁・二七五〇円）教師の在り方、その世論や実態は、この二〇年で大きく変化した。教職課程で「教師論」が必修となったのは二〇〇〇年度。教員免許更新制が実施された二〇〇九年度は、モンスターペアレントによるクレームの激しい時代でもあった。現在では教員の働き方改革が進み、教員の役割について保護者も地域住民も冷静に考え、チーム学校という概念が浸透しつつある。精神論による「教師論」ではなく、教職の意義、教員の働き方改革や学び続ける教員などの最新動向、教員の役割・職務内容を教育基本法や地方公務員法などの引証により逐条で解説。教師を目指している人にも、教師について考え直したいと思う現職教員にも参考になるリアルな教師論！

▼牧野良三編『**モノと空間のデザインを考える**』（A5判・一四四頁・一七六〇円）ムサビ通信「環境形成デザイン」教科書。SDGsに基づき、生活環境におけるモノから空間までのデザインを複眼的に追究する。

明星大学出版部

▼神林寿幸・樋口修資・青木純一『**背景と実態から読み解く教育行財政**』（A5・三四〇頁・二九七〇円）本書は豊富な資料、データをもとに背景と実態に着目しながら日本の教育行財政制度を詳細に解説する。初学者に加えて、教育行財政を専攻し、学位論文執筆にむけて研究テーマを探している、あるいは関連事項の理解を深めたいという学生、大学院生にぜひ読んでほしい。さらに、教育行財政制度について学びたいという教育関係者にもおすすめしたい。

▼樋口修資『**第2版　教育の制度と経営15講**』（A5・二四〇頁・二二〇〇円）憲法・教育基本法体制及び公教育制度を支える国と地方の教育行政の仕組みを踏まえて、学校制度と就学制度、学校の管理運営と組織編成、教職員の身分・服務と勤務管理や研修制度、学校の説明責任と地域参画の学校づくりなど教育の制度的・経営的事項の全体像を明らかにする。また、教育課程と生徒指導について取り上げるとともに、安全安心な学校生活を確保するための学校の保健安全管理の事項を取り上げる。

早稲田大学出版部

※「早稲田新書」創刊

▼加藤諦三著『**生きることに疲れたあなたが一番にしなければならないこと**（早稲田新書 1）』

▼森永邦彦著『**AとZ　アンリアレイジのファッション**（早稲田新書 2）』

▼小山鉄郎著『**村上春樹の動物誌**（早稲田新書 3）』

▼濱田政則・小長井一男・清野純史・鈴木智治・三輪滋・鈴木乃里子著『**国境なき技師団　スマトラ島から東北へ　災害復興支援の15年**（早稲田新書 4）』（各巻　新書判・税込価格九九〇円）

関東学院大学出版会

▼中村克明著『**日本国国憲案の研究　植木枝盛憲法案における軍事と人権**』（A5判・一八六頁・二四二〇円）従来、日本国憲法にも匹敵する、あるいはこれを凌ぐ民主的な憲法案であるといわれてきた植木枝盛作成の日本国国憲案について、特にその軍事条項と人権条項について検討し、その重大な問題点を明らかにする。また同案の起草者である植木の思想を知るためのツールとして、「植木枝盛図書目録」を収録。

第1章　日本国国憲案の防衛構想に関する考察、第2章　日本国国憲案の人権保障に関する考察、第3章　校訂・日本国国憲案、第4章　植木枝盛関連図書目録

名古屋大学出版会

▼伊藤大輔著『**鳥獣戯画を読む**』（A5判・三五二頁・四九五〇円）謎の国宝絵巻「鳥獣戯画」。なぜ動物が擬人化されているのか。流動する画面はどのように連環しているのか。中世日本の芸能・王権・美意識にもとづく精緻な分析と、動物と人間の関係についての考察により、全四巻を読み解く。マンガ起源論も検証。

▼中村督著『**言論と経営―戦後フランス社会における「知識人の雑誌」**』（A5判・四四二頁・五九四〇円）言論によって民主主義に奉仕すると同時に、私企業として資本主義のなかで動くジャーナリズム。戦後フランスに生まれ、知識人を結集する一方、市場で稀有な成功を収めたニューズマガジンの歴史を、変容する社会とともに捉えた俊英の力作。

▼岡本拓司著『**近代日本の科学論―明治維新から敗戦まで**』（A5判・五五二頁・六九三〇円）われわれは科学をどう考えてきたのか――。科学の営みや社会との関係をめぐる言説が、文明開化、教養主義、ロシア革命、日中戦争、対米戦といった歴史の流れに呼応し、劇的に変転する様を、初めて一望する労作。

名古屋外国語大学出版会

▼石田聖子・白井史人編『**世界は映画でできている**』（A5判・三五〇頁・二二〇〇円）欧米、南米、アジア、ロシア…。世界の映画が辿った激動の歴史。傑作・問題作の徹底分析。時代背景。各言語や文化の専門家が腕をふるう、ユニークで知的なガイド。映画の見方が変わる。

▼シンジルト・地田徹朗編著『**牧畜を人文学する**』（A5判・三五四頁・二二〇〇円）ユーラシアからアフリカまで、世界の牧畜の今がわかる本。人間と家畜と草原の共生、牧畜社会の歴史、国家との確執など。有数の研究者集団が執筆。

京都大学学術出版会

▼土屋由香著『**文化冷戦と科学技術**』（A5判・三五〇頁・三五二〇円）二〇世紀、科学技術に心踊らせた私たち。しかしその憧れは、実は冷戦の時代、東西両陣営による「世界の心を勝ち取る戦い」に科学技術が利用された結果と言ってよい。文化冷戦の実態に鋭く迫る。

▼沓掛良彦著『**オルフェウス変幻―ヨーロッパ文学にみる変容と変遷**』（A5判・五五八頁・五九四〇円）亡き妻を求めて冥界に降りるオルフェウス像。その原話はどのように誕生し、伝承のなかで変容していったのか。古代ギリシアから近代にいたる文学を渉猟しながら、伝説的な詩人の姿を跡づける。

▼大塚柳太郎・寺嶋秀明編『**生態人類学は挑む**』（全16巻）人類社会進化史を再構成し、人類の複雑さをトータルに捉える営みは、この時代に新たな思考を拓く挑戦となる。その最新の成果を伝える。各A5判。◎既刊＝大塚柳太郎編『**動く・集まる**』（セッション1 三三六頁・三五二〇円）、太田至著『**交渉に生を賭ける―東アフリカ牧畜民の生活世界**』（モノグラフ1 三〇六頁・三三〇〇円）

大阪大学出版会

▼岡田露子著『**岸田理生の劇世界 アングラから国境を越える演劇へ**』（四六判・四八八頁・四九五〇円）『**糸地獄**』などの主要作品から劇作手法上の独自性を分析するとともに、問題意識の変遷を捉える。

▼宮前良平著『**復興のための記憶論 野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー**』（四六判・三一八頁・四二九〇円）東日本大震災の被災写真返却活動を続けてきた著者が、記憶、想起と復興の関係を問い直し、想起の場と寄り添い方について考える。

▼寺田健太郎作／いぬいまやこ絵『**ねえねえはかせ、かぐや姫はどうやって月に帰ったの？ 満月に吹く地球の風のおはなし**』（A4変判・三二頁・一八七〇円）すい星みたいに、じつは地球にも月までとどく「しっぽ」があるのです。満月のときだけ、この「しっぽ」で地球の風が月に酸素を運んでいるのだそうです。かぐや姫は地球の風にのって月に帰れたのでしょうか？

関西大学出版部

▼土倉莞爾著『**西ヨーロッパ・キリスト教民主主義の研究**』（A5判・四五四頁・四〇七〇円）第二次世界大戦の直後、西ヨーロッパにある多くの国で隆盛を極めた「キリスト教民主主義政党」。しかし、一九七〇年代頃から衰微していった。なぜ、「キリスト教民主主義」は終わったのだろうか。本書はフランスを中心として、西ヨーロッパのキリスト教民主主義の歴史をたどる研究書である。

▼戴耀晶著／李佳樑・小嶋美由紀共訳『**現代中国語アスペクトの体系的研究**』（A5判・二六八頁・三六三〇円）中国語におけるアスペクト研究の第一人者戴耀晶氏の名著『現代漢語時体系統研究』の日本語訳書。中国語に触れた人なら一度は興味を持つ中国語の難解なアスペクト現象を、先人の知見を参照しながら、著者独自のアプローチに基づき明解にひも解く。

関西学院大学出版会

▼齋木喜美子著『**沖縄児童文学の水脈**』（A5判・三五六頁・五〇六〇円）
▼岡野祐子著『**EU国際裁判管轄規則―外なる視点からの検討**』（A5判・四三二頁・六六〇〇円）
▼關谷武司編『**インフォメーション・アナリシス5&5―世界が変わる学びの革命**』（A5判・一五六頁・一九八〇円）
▼石原俊彦著『**VFM監査―英国公検査の研究**』（A5判・三二〇頁・三九六〇円）
▼宮原浩二郎著『**ニーチェと現代人**』（四六判・一九六頁・二八六〇円）
▼田村和彦著『**ドイツ　庭ものがたり**』（四六判・二五六頁・三〇八〇円）
▼斎藤容子／リズ・マリ／李勇昕／石原凌河著『**COVID-19 各国の政策と市民ボランティア―イタリア・アメリカ・台湾・ニュージーランド**』（A5判・一二〇頁・一一〇〇円）

九州大学出版会

▼稲森雅子『**開戦前夜の日中学術交流―民国北京の大学人と日本人留学生**』（A5判・三七八頁・五九四〇円）一九三〇年前後の北京留学日記を手がかりに、不安定な社会情勢下でも互いを信頼し、共に学術研究に邁進した日中の中国学研究者の姿を辿る。〈九州大学人文学叢書19〉
▼辛島正雄『**在明の別残月抄―天下の孤本を新しい校訂本文で読み解く**』（A5判・三七〇頁・六六〇〇円）藤原摂関家存亡の危機を救うため、春日の神の加護のもと降誕したヒロインが、男女二役を果たす奇跡の物語。文献学的方法を駆使し、戦後に復活した平安末期王朝物語の難解な本文を鮮やかに読み解く。
▼見舘好隆監修・著／保科学世ほか著『**新しいキャリアデザイン―ニューノーマル時代をサバイブする**』（A5判・一六〇頁・一九八〇円）従来のビジネス実務教育やキャリア教育では指導してこなかったテレワーク対応型の社会人マナーやツールを使いこなすためのスキルを学び、新しい時代を生き抜くための教科書。

編集後記

▼今回の特集は、書店で偶然眼にした一冊の新刊がきっかけでした。印刷博物館編『日本印刷文化史』（講談社）です。古代から現代までの日本を「印刷」の視点から描いた通史は珍しく、その豊かな歴史に刺激を受けたのです。そしてふと、知り合いの教授が、海外からの学会参加者に喜ばれた東京観光として「印刷博物館」を挙げていたことも、思い出しました。昨年リニューアルされた印刷博物館をクローズアップした本特集から、出版には密接不可分の「印刷」の魅力を味わうことができるはずです。
▼「リニューアル」と言いますと、新年度を機に、小誌の装幀を一新しました。記号論やメディアの研究者でもある阿部卓也さんから、『早稲田文学』をはじめ多くの人がその装幀を眼にしている奥定泰之さんへと、デザイナーの交代です。また、表紙裏も新連載が始まりました。大学出版部の編集者が、「何年経っても忘れられない」思い出に残る一冊を、その製作秘話（？）も交えて紹介するリレー形式のエッセイです。このふたつのリニューアルにも、ご期待ください。

ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 https://www.dynic.co.jp
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 http://www.p-taihei.co.jp
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 https://www.p-taiyosha.co.jp
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 https://www.takeo.co.jp
㈱東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 https://www.toko-ai.com
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 https://www.talligent.jp
図書印刷㈱	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700 https://www.tosho.co.jp
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 http://www.nissinkoukokusya.com
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 https://www.nikkei.co.jp
日本宣伝販売㈱	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 http://www.nihon-senden.jp
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 https://www.hakuhodo.co.jp
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 https://www.fujiwara-i.com
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 http://www.heibun.co.jp
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 https://www.mainichi.co.jp
誠製本㈱	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952 http://www.makoto-seihon.com
名鉄局印刷㈱	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23 TEL 052-561-3272 http://www.meitetukyoku.co.jp
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 http://www.yubun.co.jp
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 https://www.yomiuri.co.jp

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749 https://www.asahi.com	
亜細亜印刷㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858 http://www.asia-p.co.jp	
㈱アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360 https://www.abel-sha.com	
尼崎印刷㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122 http://www.amain.co.jp	
㈱ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627 http://www.adv-logi-eng.co.jp	
王子製紙㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072 https://www.ojipaper.co.jp	
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281 http://www.bunmeisha.co.jp	
城島印刷㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102 https://www.kijima-p.co.jp	
㈱粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811 http://www.kumekawa.jp	
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001 https://www.crimsonjapan.co.jp	
港北出版印刷㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201 http://www.kohoku.co.jp	
三松堂㈱	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360 https://www.sanshodo.co.jp	
三美印刷㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131 https://www.sanbi.co.jp	
三立工芸㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171 https://www.sanritsu-net.co.jp	
三和印刷㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300 http://www.sanwaprinting.jp	
信濃印刷㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601 http://www.shinano-insatsu.co.jp	
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185 http://www.bunsenkaku.co.jp	
㈱眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181 https://www.shinkousha.co.jp	
新日本印刷㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611 https://www.sinnihon.net	
㈱精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021 https://www.seikosha-p.co.jp	
創栄図書印刷㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288 https://www.soei-pb.co.jp	
大同印刷㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 https://www.daidou-jp.com	

コロナ禍がもたらす「憲法問題」とは

コロナの憲法学

大林啓吾 編　　四六判 284 頁　定価 3,080 円（税込）

各国の感染症対策や緊急事態宣言を紹介しつつ比較憲法的分析を行い、人権および統治分野においてコロナ禍がもたらす憲法問題も考察。日本を含む各国の対応・経験から実務的・制度的示唆を引き出し、今後の感染症対策に係る立法や政策、社会設計に資する知見を提供する、関係者必読の一冊。

「分断」から／「分断」を読み解く「犯罪大国」の姿

〈犯罪大国アメリカ〉のいま——分断する社会と銃・薬物・移民

西山隆行 著　　四六判 252 頁　定価 3,080 円（税込）

政治的分断がもたらす犯罪政策と、犯罪政策をめぐる対立がもたらす社会の分断——。割れ窓理論、銃規制、麻薬取り締まり、不法移民など、現代アメリカの分断を読み解く鍵となる「犯罪」関連のテーマを政治学的に考察することで、これからのアメリカ社会と政治の行く末を占う。

人格権の過去・現在・未来を照射するモノグラフ

人格権法の発展

斉藤　博 著　　A5 判 368 頁　定価 6,600 円（税込）

著作権法の大家であると同時に、人格権という概念に早くから注目してきた、著者の人格権研究の集大成。40 年にわたる人格権法の発展を、ドイツおよびスイスにおける動きを整理し、さらには、現代社会に新たに生じているインターネットや生命科学に関する課題（SNS、ヘイトスピーチ、生殖医療、遺伝子操作など）にまで視野を広げた、知的冒険の書。

弘文堂　〒101-0062　東京都千代田区神田駿河台 1-7　◎表示価格は税込
Tel. 03-3294-4801 / Fax. 03-3294-7034　https://www.koubundou.co.jp/

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

◉北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

◉弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町 1 番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

◉東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

◉流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

◉聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

◉慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

◉専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

◉玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

◉中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

◉東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

◉東京電機大学出版局
〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番
TEL 03-5284-5385　FAX 03-5284-5387

◉法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

◉武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町 1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

◉武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

◉明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

◉早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

◉関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

◉名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

◉名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

◉京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

◉大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

◉関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

◉関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

◉九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜 3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ 305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160

◉大阪経済法科大学出版部（休会）
〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

大学出版126号（2021年春）

2021年5月1日発行
頒価 100円（〒共）

［発行所］
一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

［表紙デザイン］奥定泰之

［表紙写真］
昨年リニューアルオープンした印刷博物館の新たな常設展（「印刷の日本史」ゾーン、本誌 12 頁参照）

＊季刊「大学出版」は、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます